

# 中学生・高校生の「性の多様性」への意識調査

—— 徳島県の中学生と高校生を対象に ——

葛西 真記子

(キーワード：中学生, 高校生, 性の多様性, セクシュアル・マイノリティ)

## 【問題と目的】

### 1. はじめに

従来、社会では性別の二元論が強く根付いているが、近年では多様な性のあり方が見直され、医療、法律や条例、教育、マスメディアなど様々な領域においてセクシュアル・マイノリティの人権を守ろうとする機運が高まりつつある。たとえば、「性同一性障害(Gender Identity Disorder)」は、2013年、米国精神医学会発表の精神疾患の分類リストであるDSM(Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders)が第5版(American Psychiatric Association, 2013)に改訂されると、「性別違和(gender dysphoria)」として定義づけられた。また世界保健機関(WHO)が公表するICD(International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems)においても、2018年に行われた第11版への改訂により名称が「Gender Incongruence」と変更された。これによって病理性が薄まった表現となり、さらには精神疾患でも身体疾患でもない第3のグループとして位置づけられることとなった。

日本においては、セクシュアル・マイノリティの人権運動や多様な性のあり方を受け入れようとする動きが見られる。たとえば、2018年、性別適合手術への保険適用化が導入され、性同一性障害の治療の見直しとともに専門医の拡充や医療技術の向上など今後の展望が見出された。同性パートナーシップ証明制度については、2015年導入の東京都渋谷区を皮切りに、2020年6月30日の時点で全国の51の自治体がすでに施行しており、全国で1052組がパートナーとして登録している(虹色ダイバーシティ, 2020)。教育分野においては、文部科学省(2015)が「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」という教職員向けの指針を各都道府県や指定都市の教育委員会へ通達した。また、2017年度の教科書改訂により、一部教科書上(高校の公民や家庭科)にセクシュアル・マイノリティの記述が見られるなど、少しずつ性の多様性が認められる社会へと変化してきた。さらに、2019年より教科化される中学校道徳の教科書には、初めてセクシュアル・マイノリティが含まれることとなった。このような動向は、議論の余地は残るものの、セクシュアル・マイノリティの人々への差別撤廃の第一歩として大きな意義をもつといえる。

### 2. セクシュアル・マイノリティの現状

セクシュアル・マイノリティの人々は、多くの場合、「男」と「女」の性別の二元論や異性愛主義の考えのもと、学校や社会で生きづらさを抱え、からかいやいじめ、不登校、自殺念慮、精神疾患といった二次的な心理的問題を招く可能性が示唆されている。たとえば、性別違和をもつ人々は、書類を記入する場面では本名と性別を書くことに嫌気を感じたり、健康診断の際に自分の望まない身体的性をさらすことに苦痛を感じたりする(土肥, 2015)。また、日高(2017)が発表したLGBT当事者の意識調査によると、小・中・高校における「いじめ」は全体の約6割が経験しており、職場や学校で差別的な発言を経験した人は7割以上であった。さらにトランスジェンダーにおいては、62.0%が自殺念慮を、10.8%が自殺企図を、16.1%が自傷行為を経験しており、そのピークは13~18歳の間であることが報告された(針間・石丸, 2010)。また、ゲイ・バイセクシュアル男性の自殺未遂関連行動に関しては、複数回の調査の結果、およそ65%の人が自殺念慮を経験し、さらに約15%の人が実際に自殺未遂を経験している傾向にあり、これは異性愛男性と比較すると5.98倍にも及ぶことも示されている(日高, 2015a)。

特に、セクシュアル・マイノリティの人々が自身の性的指向や性別違和において葛藤を引き起こすようなライフ・イベントを経験するのは、中学校・高校の学齢期に集中していることがわかっている。たとえば、ゲイ・バ

イセクシュアル男性を対象とした日高・木村・市川（2007）の調査によると、「ゲイであることをなんとなく自覚した」のは平均13.1歳、「異性愛者ではないかもしれないと考えた」のは15.4歳、「自殺を初めて考えた」のは16.4歳、「ゲイであることをはっきりと自覚した」のが17.0歳、そして初めての「自殺未遂」が17.7歳であった。また、トランスジェンダーに関する調査では、FTM(Female to Male)は小学校入学以前から性別に違和感を自覚し始め、66.8%が思春期以前に性別の違和感を自覚していたのに対し、MTF(Male to Female)では性別の違和感を自覚した年齢が思春期から成人期と広範囲に分布していた（中塚・江見，2004）。これらの中で、思春期に多い問題行動としては、不登校が全体の29.2%、自殺念慮が74.8%、自殺未遂・自傷行為も31.0%と高率であった。両者とも、セクシュアリティや性別の違和感を自覚した時期に差異はあるものの、第二次性徴が見られる思春期に身体的性ないしは社会的性と性自認との間に違和感を抱きやすく、さまざまな場面で困難に遭遇し、ストレスを感じていると考えられる。このように、セクシュアル・マイノリティの人々にとって思春期・青年期は、その時期の特性がゆえに精神的に不安定である一方で、第二次性徴による葛藤の経験やアイデンティティの模索という観点から考えると特に重要な時期であるといえる。葛西（2014）が述べているように、この時期にいかにか性の多様性やセクシュアル・マイノリティに対する肯定的なメッセージを得られるか、そして、支持的・受容的な環境にいられるかが、後のメンタルヘルスに影響を及ぼすことになるであろう。

### 3. セクシュアル・マイノリティに対する意識

条例や法令等、セクシュアル・マイノリティの方々への対応は進みつつあるが、2015年に吉仲・風間・石田・河口・釜野が行った、「同性愛や性同一性障害(GID)など、セクシュアル・マイノリティの人に対しどう思うか」という意識調査では、同性婚反対派の割合は48.9%であり、友人が同性愛者であった場合、抵抗がある人の割合が男性で53.2%、女性で50.4%であった。関係の近い人ほど嫌悪的な意見が多くなり、同僚では42%、子どもでは72%の参加者が、同性愛者であったら嫌だと回答している。他に特徴的な結果として、同僚が同性愛者であったら嫌だと回答した40代男性の割合は71.5%であった。Pew Research Center (2013) が世界38,000人を対象に実施した同性愛に対する社会的容認度の調査においては、日本では同性愛を容認する派は全体で54%、内訳として30歳未満では83%、30歳～49歳で71%、50歳以上で39%であった。2007年度の調査結果である容認する派は49%と比較して5ポイント上昇したが、80%～90%であるスペイン、ドイツ、カナダなどの国々と比較すると、未だ否定的な見方が強いと言える。

また、2019年に行われた「LGBTに関する意識行動調査」(LGBT総合研究所, 2019) では、全国の20歳以上の成人約35万人のうち、LGBTという言葉を知っていたのは、91%であった。しかし、理解しているかどうかについては57%に留まっていた。この値は同研究所が2016年に行った調査の、認知度は54.4%、理解度は32.7%と比べるとかなり上がってきたことがわかる。しかし、「身の回りにLGBTの方がいたか」という問いには、83.9%が「いない」と回答していた。これは、セクシュアル・マイノリティ当事者が周りに自身のことをカミング・アウトしている者が少ないからという理由もあるだろうが、「周りにいる」という意識を持っていないと、周りはすべて異性愛者で、シスジェンダーであるという異性愛者主義・シスジェンダー主義に陥っているからだともいえる。セクシュアル・マイノリティ当事者との接触体験や知識を得ることは、当事者に対する偏見にも肯定的影響を与えるという先行研究は数多く示されている(和田, 2010; 山本・大蔵・重本, 2012)。そして、セクシュアル・マイノリティについての知識をえたり、当事者からの話を聞いたりすることができるのは、学校教育の場においてなのではないかと考える。

### 4. 学校教育現場におけるセクシュアル・マイノリティ

学校教育現場において多様な性のあり方を教育することは重要である。日高（2015b）の調査から、現職教員の約7割がセクシュアル・マイノリティについて授業で扱う必要があると考えているものの、実際に授業に取り入れたことがある者は13.7%であったことが示された。この背景として、教員のセクシュアル・マイノリティにおける知識・情報と経験の不足や、意識や理解のばらつき、そして学校内の体制や環境の整備が不十分であること、教員の研修のための時間や授業時間の確保が難しいことが考えられる。実際に現職教員の中で、教員養成機関において同性愛について学んだことがあるのは7.5%、「性同一性障害・性別違和」に関しては8.1%と、数少ないことが報告されている(日高, 2013)。しかしながら、教員が性の多様性に関する肯定的な情報を積極的に発信していくことは、まだ自身の性のあり方をはっきりと自覚できていない、あるいはそれに否定的な感情を抱いているセクシュアル・マイノリティの児童・生徒のセクシュアリティの受容を促すことにおいて、大きな意味

をなすことも示唆されている(奥村・加瀬, 2016)。また, それは, セクシュアル・マイノリティ以外のセクシュアル・マジョリティ(性的多数派)の児童・生徒がセクシュアル・マイノリティに対する偏見や差別の意識をもつのを防ぐことにも繋がるのである。

## 5. 年齢・世代によるセクシュアル・マイノリティへの意識と態度

これまで年齢や世代によるセクシュアル・マイノリティへの意識や態度については, たとえば, 吉仲らの研究(2015)により, 20代から60代では, 年齢が上がるほど同性愛に対して否定的な意見・態度を持つことが示された。これは性役割態度に対する社会通念が変化してきたことや, 時代の変化と共に個人主義的な考えを持つ人が増加したこと(家制度の廃止等)などが影響しているといえる。また, BL(ボーイズラブ)・GL(ガールズラブ, 百合と呼称される場合もある)と呼ばれるような, 男性同士または女性同士の恋愛を描いた創作物は, 1970年代から一般に販売される機会が増え, 愛好されることで2015年度には220億円の市場規模となっている。この市場はさらに拡大しており, 同性愛者をテーマとして映画・ドラマやBL原作の映画が作成されたりしている。

様々な要因により, 総論的には年齢が高いほど否定的であるとされる同性愛者への態度だが, それでは年齢が低いほど肯定的(または否定的でない)かといえ, 必ずしもそうとはいえない。田中・伊藤・葛西(2019)は, 中学生と大学生で同性愛への態度を比較した結果, 中学生は有意に同性愛への態度が否定的であった。しかし, 高校生と比較した結果(葛西・田中, 2020), 中学生の方が高校生より肯定的であり, かつ周りにいても嫌ではないと答えていた。

## 6. 本研究の目的

以上を踏まえ, 本研究では, 徳島県内の中学生・高校生のセクシュアル・マイノリティに対する意識調査を行うこととした。

徳島県では, 平成30年度より徳島県人権問題講師団として性的マイノリティに関する講師の派遣を行ったり, 平成30年4月には, 「性の多様性を理解するために—教職員用ハンドブック—」を作成し県内の学校に配布するなど, セクシュアル・マイノリティについて積極的に取り組んでいる。

葛西・田中(2020)の調査によって, LGBに対する態度はある程度, 明らかとなっているが, 基本的な知識や意識についての調査は行われていない。また, セクシュアル・マイノリティに関する状況は, パートナーシップ制度を認めている自治体が年々増加しており, 世界の情勢も変化していることから, 近年の意識調査を行う必要性がある。このような意識調査を行うことで, 今後, 中学生・高校生対象の研修等を行う際に, どのような知識を提供する必要があるのか, どのような誤解が存在しているのかが明らかとなり, より効果的な研修を行うことが可能になると考えた。

### 【対象と方法】

本研究では, 徳島県内の中学生, 高校生に対し質問紙調査を行った。それぞれの学校では, 著者が「セクシュアル・マイノリティ」や「性の多様性」と題して講演や研修を行った際に, 生徒たちの現状を知るために研修を受ける前に「知っていたか」, また今回の研修で「理解したか」の程度について回答をお願いした。また, より現状を把握するために, セクシュアル・マイノリティに関する「からかい」や「いじめ」についても質問した。

#### 1. 項目の作成及び選定

##### (1) フェイス項目

対象者には, それぞれ所属の学校で質問紙の回答を求めたので, フェイス項目としては, 学年と性別をたずねた。性別については, 自由記述とした。

##### (2) セクシュアル・マイノリティに関する意識調査

セクシュアル・マイノリティに関する意識については, 既存の尺度ではなく, できるだけ項目数を少なくし, 学校現場で答えてもらいやすいようにした10項目の質問紙を作成した(Table 1)。回答は, 「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法とした。

Table 1 セクシュアル・マイノリティに関する意識調査

1	セクシュアル・マイノリティという言葉を知っていましたか
2	セクシュアル・マイノリティの知り合いがいますか
3	セクシュアル・マイノリティの友達がありますか
4	人に、セクシュアル・マイノリティについて説明できますか
5	セクシュアル・マイノリティについてもっと知りたいと思いますか
6	LGBTという言葉を知っていましたか
7	同性愛と性別違和（性同一性障害）の違いがわかりますか
8	セクシュアル・マイノリティの人と友達になりたいと思いますか
9	「ホモ」「おかま」というような言葉でからかわれた人が周りにいましたか
10	セクシュアル・マイノリティに関係したことでいじめられた人はいましたか

上記の項目以外に、自由記述欄をもうけ、研修の感想と、セクシュアル・マイノリティについて思っていることを書いてもらった。

## 2. 調査方法と対象

中学校と高校においては、フェイスシートの注意事項をそれぞれの担任教員に読み上げてもらった上で、配布し、その場で回収した。調査時期は、中学生が2019年6月、高校生が2019年9月であった。

回答に大きな欠損のあったデータ等を排除し、中学生673名（1年生220名，2年生220名，3年生231名，不明2名），高校生218名（3年生）を分析対象とした。分析にあたって、SPSS(Ver 23)を用いて統計処理を行った。

### 【結果】

#### 1. 各項目の結果

それぞれの項目について中学生と高校生と別々に結果を提示する (Table 2)。

まず、知識について問う項目①「セクシュアル・マイノリティという言葉を知っていましたか」については、中学生の14.1%が、高校生の19.3%が「はい」と答えていた。項目④「人に、セクシュアル・マイノリティについて説明できますか」については、中学生の39.4%が、高校生の14.7%が「はい」と答えていた。項目⑥「LGBTという言葉を知っていましたか」では、中学生の19.7%が、高校生の25.2%が「はい」と、項目⑦「同性愛と性別違和（性同一性障害）の違いがわかりますか」では、中学生の56.6%が、高校生の38.1%が「はい」と答えていた。

次に接触経験である項目②「セクシュアル・マイノリティの知り合いがいますか」については、中学生の5.3%が、高校生の12.4%が「はい」と、項目③「セクシュアル・マイノリティの友達がありますか」には、中学生の3.9%が、高校生の10.1%が「はい」と答えていた。

また、これからの願望である項目⑤「セクシュアル・マイノリティについてもっと知りたいと思いますか」には、中学生の51.1%が、高校生の34.9%が「はい」と、項目⑧「セクシュアル・マイノリティの人と友達になりたいと思いますか」には、中学生の38.7%が、高校生の27.5%が「はい」と答えていた。

最後に、からかひやいじめの現状について問うた項目⑨「「ホモ」「おかま」というような言葉でからかわれた人が周りにいましたか」では、中学生の41.5%が、高校生の20.2%が「はい」と答え、項目⑩「セクシュアル・マイノリティに関係したことでいじめられた人はいましたか」には、中学生の3.7%、高校生の2.8%が「はい」と答えていた。

Table 2 項目の分布（数値は割合%）

	項目内容	中学生			高校生		
		はい	どちらでもない	いいえ	はい	どちらでもない	いいえ
1	セクシュアル・マイノリティという言葉を知っていましたか	14.1	1.9	83.3	19.3	3.2	77.5
2	セクシュアル・マイノリティの知り合いがいますか	5.3	17.3	77.0	12.4	7.8	79.8
3	セクシュアル・マイノリティの友達がありますか	3.9	18.5	77.3	10.1	7.3	82.6
4	人に、セクシュアル・マイノリティについて説明できますか	39.4	21.3	38.5	14.7	11.0	74.3
5	セクシュアル・マイノリティについてもっと知りたいと思いますか	51.1	21.5	26.5	34.9	17.4	46.3
6	LGBTという言葉を知っていましたか	19.7	2.4	77.3	25.2	2.8	71.1
7	同性愛と性別違和（性同一性障害）の違いがわかりますか	56.6	17.6	25.0	38.1	11.0	50.9
8	セクシュアル・マイノリティの人と友達になりたいと思いますか	38.7	44.3	16.6	27.5	30.7	38.1
9	「ホモ」「おかま」というような言葉でからかわれた人が周りにいましたか	41.5	13.5	44.6	20.2	5.5	74.3
10	セクシュアル・マイノリティに関係したことでいじめられた人はいましたか	3.7	19.0	77.0	2.8	8.7	88.5

## 2. 中学生と高校生の比較

それぞれの項目について中学生と高校生の平均値の差をみるためにt検定を行った。比較にあたっては、人数の偏りがあるため、高校生が3年生であるので中学生は3年生のみを対象とした。その結果、項目②「知り合いがいる」と項目③「友達がいる」以外のすべての項目で中学生と高校生に差がみられた(Table 3)。項目①「セクシュアル・マイノリティという言葉を知っていた」、項目⑥「LGBTという言葉を知っていた」という知識に関する項目では、高校生の方が有意に多く「肯定」していたが、項目④「セクシュアル・マイノリティを説明できる」、項目⑤「もっと知りたい」、項目⑦「同性愛と性別違和の違いがわかる」、項目⑧「友達になりたい」、項目⑨「からかわれた人がいた」、項目⑩「いじめられた人がいた」の項目では、中学生の方が有意に多く「はい」と答えていた。

## 3. 友達がいるかどうかによる違い

これまでの先行研究で、接触体験によってセクシュアル・マイノリティに対して肯定的になるという結果が示されたものがあるので(和田, 2010; 山本・大蔵・重本, 2012), 中学生・高校生それぞれにおいて、セクシュアル・マイノリティの友達がいると答えた者といないと答えた者の間に他の項目の得点に差があるかを分析した(Table 4, 5)。その結果、中学生においては、友達がいる方が、セクシュアル・マイノリティという言葉を知っており、説明できるとしており、もっと知りたいと思っており、友達になりたいと思っていた。LGBTという言葉の意味や同性愛と性別違和の違いについての差はなかった。高校生では、友達がいる方が、セクシュアル・マイノリティやLGBTという言葉を知っており、人に説明でき、同性愛と性別違和の違いがわかり、もっと知りたいと思っており、友達になりたいと思っていた。

Table 3 中学生と高校生の比較

	項目内容	中学生		高校生		t
		平均	SD	平均	SD	
1	セクシュアル・マイノリティという言葉を知っていましたか	2.76	0.64	2.58	0.79	2.53*
2	セクシュアル・マイノリティの知り合いがいますか	2.70	0.59	2.67	0.69	0.37
3	セクシュアル・マイノリティの友達がありますか	2.71	0.57	2.72	0.63	0.34
4	人に、セクシュアル・マイノリティについて説明できますか	2.00	0.93	2.60	0.73	-7.54***
5	セクシュアル・マイノリティについてもっと知りたいと思いますか	1.72	0.84	2.12	0.90	-4.86***
6	LGBTという言葉を知っていましたか	2.61	0.78	2.46	0.87	1.19
7	同性愛と性別違和（性同一性障害）の違いがわかりますか	1.57	0.84	2.13	0.94	-6.84***
8	セクシュアル・マイノリティの人と友達になりたいと思いますか	1.77	0.72	2.11	0.82	-4.88***
9	「ホモ」「おかま」というような言葉でからかわれた人が周りにいましたか	1.94	0.95	2.54	0.81	-7.18***
10	セクシュアル・マイノリティに関係したことでいじめられた人はいましたか	2.71	0.56	2.86	0.42	-3.18*

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

Table 4 友達がいるかどうかによる比較（中学生）

	項目内容	いる		いない		t
		平均	SD	平均	SD	
1	セクシュアル・マイノリティという言葉を知っていましたか	2.27	0.96	2.74	0.67	-2.46*
4	人に、セクシュアル・マイノリティについて説明できますか	1.62	0.85	2.05	0.90	-2.61*
5	セクシュアル・マイノリティについてもっと知りたいと思いますか	1.42	0.76	1.85	0.87	-2.75*
6	LGBTという言葉を知っていましたか	2.38	0.94	2.64	0.76	-1.65
7	同性愛と性別違和（性同一性障害）の違いがわかりますか	1.44	0.82	1.72	0.86	-1.58
8	セクシュアル・マイノリティの人と友達になりたいと思いますか	1.50	0.71	1.83	0.74	-2.29*

\*p&lt;.05

Table 5 友達がいるかどうかによる比較（高校生）

	項目内容	いる		いない		t
		平均	SD	平均	SD	
1	セクシュアル・マイノリティという言葉を知っていましたか	1.55	0.91	2.74	0.66	-6.98***
4	人に、セクシュアル・マイノリティについて説明できますか	2.18	0.85	2.68	0.69	-2.63*
5	セクシュアル・マイノリティについてもっと知りたいと思いますか	1.57	0.75	2.19	0.91	-3.51**
6	LGBTという言葉を知っていましたか	1.77	0.99	2.58	0.81	-3.63**
7	同性愛と性別違和（性同一性障害）の違いがわかりますか	1.59	0.85	2.22	0.93	-3.21**
8	セクシュアル・マイノリティの人と友達になりたいと思いますか	1.33	0.58	2.24	0.80	-6.52***

\*p&lt;.05, \*\*p&lt;.01, \*\*\*p&lt;.001

#### 4. 自由記述

「セクシュアル・マイノリティについての話の感想や、セクシュアル・マイノリティについて思っていることなど自由に書いてください」という自由記述式の質問について、中学生は、「よく知らなかった」「初めて聞く言葉」というようなこれまで全く聞いたこともなく、知識がなかった者や、研修でセクシュアル・マイノリティについての知識を得た後は、「困っている人がいたら助けたい」「いじめられている人がいたら自分が何かを言いたい」というようにセクシュアル・マイノリティの方の力になりたいと思っている者が多くいた。また、「ホモという言葉は傷つけると知らずに使っていた」という者もいた。また、「自分の周りにいないと思っていたけど、そんなにいると知って驚いた」など、実際の数値を知り驚いた者も多かった。

それに対して、高校生では、「自分の周りにいる」「友達から言われたことがある」という身近にセクシュアル・マイノリティの当事者がいた者や、「友達にカミングアウトされたけど、よくわかっていなかった」という者もいた。また、「漫画やラノベで知っていた」「テレビでみたことがあった」というようにメディアを通して知識があった者もいた。

#### 【考察】

本研究の目的は、近年の徳島県内の中学生・高校生のセクシュアル・マイノリティに対する知識の程度や意識について明らかにすることであった。また、からかいやいじめの現状についても把握することであった。

##### 1. 中学生と高校生の知識について

中学生と高校生のセクシュアル・マイノリティに関する知識については、「セクシュアル・マイノリティ」、「LGBT」どちらも知っていたと答えた者は、15%から25%であり、まだまだ十分に知られていなかったことが明らかとなった。2019年のLGBT総合研究所の成人に対する調査では、91%の者が知っていると答えたいた現状と比べると、社会よりも学校現場の方が知識の浸透が遅れているということが言える。中学生と高校生を比較すると、高校生の方が「知っていた」者が多く、認知度が高いことがわかる。高校生の方がニュース等に触れる機会や社会の出来事を目にする機会が多いのだろうと推測できる。また、自由記述において、高校生は、「漫画」、「ラノベ」や「テレビ」でセクシュアル・マイノリティに触れる機会がより多かったようで、これも認知度の高

さに関係しているだろう。

セクシュアル・マイノリティについて説明できるかどうかについては、中学生の方がかなり高かった。研修後のアンケートであったため、研修で聞いた内容を素直に理解したと思われる。また、よく混同されやすい同性愛（性的指向）と性別違和（性自認）の違いについても中学生の方がかなり多くの者が理解していた。これら二つとも、中学生の方が、研修を受けて素直に「理解した」と思い、高校生は「理解はしたが、他者への説明となると果たして正確にできるだろうか」と戸惑いがあったのではないかと考えられる。他者への説明となると理解したかどうかの判断がより厳密になり、自信がないと感じたのかもしれない。

セクシュアル・マイノリティの知り合いや友達の有無については、中学生も高校生も「いる」と回答した者がかなり少なかったために有意差がなかったと思われる。葛西・田中（2020）の調査では、中学生の方が知り合いのいる者が多いという結果になっていたが、おそらく調査対象となった中学校において当事者の方の講演や活動が活発にあり、それが影響しているのではないかと考察されていた。それに対して、今回の調査協力校は、そのような機会がまだなく、カミングアウトしている方との接触経験がなかったのであろう。つまり、地域性やその学校の取り組みの度合いによって変わってくるだろうと思われる。

もっとセクシュアル・マイノリティについて知りたいと思うか、友達になりたいと思うかという問いには、中学生の方が高校生よりも肯定する者が多かった。中学生の方が高校生よりも、知らなかったことを知り、もっと知りたいという願望をもったということが言える。これは、Stotzer（2009）が述べているように、年齢の低い段階での教育の方がより効果があるということを示している。今回の調査では他の要因との関連は明らかになっていないが、高校生の方が社会の偏見やスティグマ等がすでに内在化されており、知り合いになりたいと思わないのかもしれない。しかし同時に、自由記述に書かれていたように、高校生の中には友人からカミングアウトされた経験があり、すでに周りにセクシュアル・マイノリティの当事者がいるという者もあり、知りたい、友達になりたいという動機を持つ者と持たない者の二極化が起こっているとも考えられる。

最後に、からかいやいじめの現状についてであるが、からかいといじめともに、中学生の方が周りで見聞きしたことがある者が多かった。数値上では、いじめられていた者は少なかったようであるが、からかいは、中学生の約4割が周りにいたと答えており、日常的にセクシュアル・マイノリティに関するからかいがあることがわかった。いじめになれば、教員も気づき、なんらかの対処をするだろうが、からかいについては、教員が見聞きしたとしても対応しないこともあるのではないかと考えられる。教員が何も言わないことで、そのからかいの内容を肯定することになり、周りにいる者はからかってもいいと学習してしまう。つまり、からかいをなくすためには、いじめと同様に、そのような発言を見聞きしたら、即なんらかの対応をすることが大切である。そのためにはどのような言葉でのからかいがあるのかについての現状を把握しておく必要もある。

## 2. セクシュアル・マイノリティの友達がいるかどうかによる違いについて

セクシュアル・マイノリティの友達がいるかどうかによって、中学生や高校生の意識に違いがあり、友達がいる者はより知識を持っているのではないかという点については、中学生においては、友達がいる方が、セクシュアル・マイノリティという言葉を知っており、説明できると思っており、もっと知りたいと思っており、友達になりたいと思っていた。一方、LGBTという言葉の意味や同性愛と性別違和の違いについては、友達の有無で差はなかった。セクシュアル・マイノリティとの個人的な接触経験は、知識や動機付けに影響を与え、より肯定的な態度に結び付くと考えられる。しかし、成人でも概念の混同が多い同性愛と性別違和についてはその違いが判らず、LGBTという言葉も知らなかった。だが、高校生になると、友達であるというセクシュアル・マイノリティとの個人的な接触経験は、知識や動機付けとなり、友達がいなくても理解度が有意に高くなっていった。これらの結果は、先行研究で示されている結果（和田，2010；山本・大蔵・重本，2012）と一致するものであった。個人的な接触経験を増やすためには、学校環境を偏見や差別のない安心・安全な場にし、セクシュアル・マイノリティ当事者が友人にカミングアウトしやすくなる必要がある。そのような環境はセクシュアル・マイノリティ当事者にとって自分を偽らずに自分らしくいられる環境であり、当事者たちの精神的健康にもいい影響を与えるだろう。

## 3. 本研究のまとめ

本研究によって明らかとなったことは、2019年度の徳島県における中学生と高校生のセクシュアル・マイノリティに関する認知度と理解度は、全国の成人のそれよりもかなり低いということであった。しかし、知識を得た

い、理解したいと思っている者はある程度存在し、学校教育の中で教えていく必要があるだろう。また、いじめは少ないが、「ホモ」や「おかま」という言葉等からかわれている者は多く、これらの言葉で傷ついている者が存在することも教えていく必要があり、教員もそのようなからかいの場面を目撃したら即対応をしなくてはならない。特に、中学生において高校生よりもからかいもいじめも多いことが明らかとなったので、中学生対象の教育や研修が重要であることがわかった。

人数は少なかったが、中学生・高校生とも、セクシュアル・マイノリティの友達がいると答えた者がおり、また、高校生は自由記述において「仲のいい友達にいます」「当事者である複数の友人がいる」と答えている者もいた。つまり、学校現場においては、セクシュアル・マイノリティ当事者が周りに必ずいるという前提で、いつでも対応できるという認識が教員の中に必要である。

#### 4. 研究の限界と展望

本研究の問題点の一つとして、高校生の研究協力者が3年生だけであった点が挙げられる。中学生と高校生の違いはある程度明らかとなったが、その違いが、高校1年生から生じているのかどうかについては明らかとならなかった。また、今回の調査はセクシュアル・マイノリティに関する研修の後に回顧法で実施したもので、研修前にどの程度肯定的にとらえていたかは明らかとならなかった。さらに、もっと知りたい、友達になりたいという願望は、研修後であったから出てきたものである可能性もあり、研修の効果であるともいえるだろう。

さらに、生徒や学校の負担に配慮し、知識や意識をできるだけ簡単に聞くために項目数を減らし、「説明できるか」という問いに対する回答からは、本当に正しい内容を説明できるのかどうかについては、明らかにできない。また、からかいやいじめは高校生よりも中学生で多く見聞きしており、さらに年少の小学生の現状を調査する必要があるだろう。からかいやいじめの内容についても自由記述で調査するなど現状の把握が必要である。

今回の調査の結果は、徳島県内の中学生と高校生を対象としたものであり、他県の中学生や高校生との比較も今後必要である。2020年4月に徳島市においてパートナーシップ制度が認められた。これは、徳島県内では初であり、四国内においても香川県三豊市や高松市と同時期であった。2020年9月現在、パートナーシップ制度は、他市にも拡大しており、それに関連するニュース等を中学生や高校生も見聞きするようになると、意識や知識はさらに変化していくのではないかと推測される。今後も継続的な実態調査を行い、その結果を学校現場に活かしていくことができれば幸いである。

#### 引用文献

American Psychiatric Association (2013). Diagnostic and statistical manual of mental disorders, 5<sup>th</sup> ed. Washington, DC: American Psychiatric Association.

土肥いつき (2015). 出会いが世界を広げていく 女も男も, 125, 71-76.

針間克己・石丸径一郎 (2010). 性同一性障害と自殺 精神科治療学, 25, (2), 247-251.

日高庸晴 (2013). 個別施策層のインターネットによるモニタリング調査と教育・検査・臨床現場における予防・支援に関する研究 <http://www.health-issue.jp/f/>

日高庸晴 (2015a). 教育現場で配慮と支援が必要なセクシュアルマイノリティ, 125, 26-33.

日高庸晴 (2015b). 子どもの“人生を変える”先生の言葉があります。平成27年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業 個別施策層のインターネットによるモニタリング調査と教育・検査・臨床現場における予防・支援に関する研究 (<http://health-issue.jp/kyouintyousa> 201511.pdf 2018年12月1日閲覧)。

日高庸晴 (2017). LGBT当事者の意識調査—いじめ問題と職場環境等の課題—([http://www.health-issue.jp/reach\\_online](http://www.health-issue.jp/reach_online) 2016\_report.pdf 2018年12月1日閲覧)。

日高庸晴・木村博和・市川誠一 (2007). 厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究推進事業 ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2 厚生労働省エイズ対策研究事業「男性同性間の HIV 感染対策とその評価に関する研究」成果報告 ([http://www.j-msm.com/report/report02/report02\\_all.pdf](http://www.j-msm.com/report/report02/report02_all.pdf) 2018年12月1日閲覧)。

葛西真記子 (2014). 心理職へのセクシュアル・マイノリティに関する教育・訓練。針間克己・平田俊明 (編著) セクシュアル・マイノリティへの心理的支援。岩崎学術出版。207-220.

葛西真記子・田中美月 (2020). 中学生・高校生・大学生の同性愛者(LG)への態度と被異質視不安傾向・異質拒否傾向との関連 鳴門教育大学研究紀要, 35, 1-13.



- LGBT 総合研究所 (2019). LGBT 意識行動調査2019 <https://lgbtri.co.jp/news/2410> (2020年9月30日取得)
- 文部科学省 (2015). 性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について (2015年4月30日).
- 中塚幹也・江見弥生 (2004). 思春期の性同一性障害症例の社会的, 精神的, 身体的問題点と医学的介入の可能性についての検討 母性衛生, 45 (2), 278-284.
- 虹色ダイバーシティ (2020). 地方自治体の同性パートナー認知件数 (2020年6月30日時点)  
<https://nijirodiversity.jp/partner/20200630/> (2020年7月31日取得)
- 奥村遼・加瀬進 (2016). セクシュアルマイノリティに対する配慮及び支援に関する研究: 学校現場に対する当事者のクレームを手がかりに 東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ, 67, 11-19.
- Pew Research Center (2013). the global divide on homosexuality <http://www.pewglobal.org/2013/06/04/the-global-divide-on-homosexuality/> (2015年12月7日取得)
- Stotzer, R. L.(2009). Straight Allies: Supportive Attitudes Toward Lesbians, Gay Men, and Bisexuals in College Sample *Sex roles*, 60, 67-80.
- 田中美月・伊藤卓・葛西真記子 (2019). 同性愛者(LG)への態度と被異質視不安傾向・異質拒否傾向との関連 鳴門教育大学学教育研究紀要, 33, 121-129.
- 和田 実 (2010). 大学生の同性愛開示が異性愛友人の行動と同性愛に対する態度に及ぼす影響 心理学研究 81, 356-363.
- 山本章加 大蔵雅夫 重本津多子 (2012). パーソナリティとイメージが同性愛者に対する態度に与える影響 徳島文理大学研究紀要 84, 85-91.
- 吉仲 崇・風間 考・石田 仁・河口和也・釜野さおり (2015). セクシュアル・マイノリティに対する意識の属性による比較: 全国調査と大学生対象の先行研究を中心に 新情報 103, 20, 1-13.

# **The Attitude Survey on Sexual and Gender Minorities among Junior High School Students and High School Students in Tokushima Prefecture**

KASAI Makiko

This study was aimed to have a grasp on the attitude of junior high school students and high school students in Tokushima towards sexual and gender minorities (SGM). The attitude survey was conducted to 673 junior high school students and 218 high school students in Tokushima after lectures on SGM. Results showed that only less than 20% students knew the word “sexual minority” and less than 25% students knew the word “LGBT,” which is much smaller numbers compared with attitude survey towards adult in 2019 (91%). However, they answered that they want to learn more and to be friends with SGM. The prevalence of teasing and bullying related to SGM was asked and junior high school students have heard of teasing in schools (41.5%) more than those of high school students (20.2%). From these results, teachers need to become more aware of teasing and bullying towards SGM students and need to guide and teach those teasing hurt them. The social situation has changed drastically around SGM in Japan (Partnership regulation, insurance coverage of SRS, and so on) and the attitudes towards SGM need to be changed. School teachers have a great responsibility to reduce prejudice and discrimination against SGM and teach positive attitudes towards all minorities.